# ドイツ・ラインラント＝プファルツ州のマル・ドライヤー首相が来校

## 外国語学部ドイツ語学科学生らと交流

10月23日、ドイツのラインラント＝プファルツ州からマル・ドライヤー首相をはじめ、政治、産業、学術、メディアなど各界の代表者26人が本学を訪れた。同州には本学の協定校が2校（ルートヴィヒスハーフェン経済大学とトリーア大学）あり、研究教育の両面で活発な交流を行ってきた。本学を同州でより広く知ってもらい、これまで以上に多角的な関係を築く手がかりとするべく、今回の訪問が実現した。

質問に笑顔で答えるドライヤー首相

会の前半では、ドライヤー首相や木村護郎クリストフ外国語学部長らが日独の移民・エネルギー政策、介護問題、災害対策などについて議論を交わした。続いてドイツ語学科の学生11人が、日本の女子学生の現状や就職活動の経験、日独の就業観の違いといったテーマでスピーチを行い、首相らから質問を受けた。同州からの留学生も交えて終始和やかな雰囲気の中で懇談が行われた。

最後に、畔道佳明学長、永井敦子学生総務担当副学長、河﨑健教授（外国語学部ドイツ語学科）、スヴェン・サーラ教授（国際教養学部）を交えての懇談が行われた。畔道学長は「両大学、州、国との関係、全てを発展させていきたい」と述べ、少子高齢化や移民の問題など、日本とドイツに共通する社会課題などにも話は及び、和やかに閉会した。

# ソフィア・オープン・リサーチ・ウィークス

## 多彩な研究成果の「今」を発信

11月6日から23日、上智大学研究機構がソフィア・オープン・リサーチ・ウィークス（SOROW）2023を開催した（後援：千代田区）。

本学では、世界各地の地域研究から宗教、人権、生命倫理、言語学、メディア、環境、新技術開発まで、幅広い分野の研究が日々行われている。本企画はこれら研究成果の発信の場として催され、今年で10回目を迎えた。期間中は講演会、展示企画、映画上映会、シンポジウムなど、全体で26の企画を実施。学内外から2000人を超す参加者が集まった。

11月7日に開催されたシンポジウム、「共生社会創成の現実：インドの取り組みから考える障がい者の支援と自立」（主催：上智大学アジア文化研究所）では、インドで障がい者の自立を支えるDifferent Art Centreのゴピナート・ムトゥカド所長らによる講演や、障がいを持ちながらもマジシャンとして活躍するヴィシュヌ氏のマジックパフォーマンスなどが行われた。そしてサリ・アガスティン理事長と日本の障がい者や社会福祉の専門家らを加えたトークセッションでは、「人々が障がい者をもっと身近に感じ、慣れが進めば、社会の理解や支援はもっと進むはず」「Different Art Centreの活動はインドを変えることができる」といった意見が出た。

シンポジウム「共生社会創成の現実」

11月22日には、みたらし加奈氏（NPO法人mimosas副代表理事、臨床心理士）による講演会、「わたしを守ること、あなたを守ること」（主催：上智大学グローバル・コンサーン研究所）を開催。本講演会は、11月25日から12月8日まで性暴力被害と服装について考える企画として行われた、「そのとき、あなたは、何を着てた？（What Were You Wearing?）」展のプレ企画という位置づけであった。みたらし氏は性暴力に関するハンドブックを配布し、さまざまな現状の説明や、被害にあった際に取るべき行動などを丹念に説明。性被害については被害者と加害者の二者関係にとどまらせず、「行動する傍観者」を増やすことが大切だと強く訴え、参加者は熱心に耳を傾けていた。

講演会「わたしを守ること、あなたを守ること」

# JICAと協働して現地の専門家育成に貢献

## ホンジュラス国立自治大学修士課程強化プロジェクト

伊呂原隆副学長（前列右）を囲んで

10月3日、4日、12日に、ホンジュラス国立自治大学（UNAH）から教員4人が来校した。

本学は、独立行政法人国際協力機構（JICA）がホンジュラスで手がける「社会経済開発人材育成のためのUNAH修士課程強化プロジェクト」について、株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング（東京・麹町）とともに受託し、技術協力を行っている。今回の来校も同プロジェクトの一環で実施された。

2016年に包括連携協定を締結以来、JICAとはさまざまな交流を行っているが、海外でのプロジェクトで協働するのは今回が初の試みとなる。

ホンジュラスは多くの国々や国際機関から多額の開発援助を受けて事業を実施しているものの、開発事業に通じプロジェクトをリードできる専門人材が不足している。

このプロジェクトでは、UNAHの修士課程の一つである「国際協力と開発プロジェクト運営管理」プログラムのカリキュラムを再構成し、同国の社会経済開発事業の効果的な実施に資するプロフェッショナル育成に寄与することが目的だ。本学からは植木安弘教授（グローバル・スタディーズ研究科国際協力学専攻）、幡谷則子教授（外国語学部イスパニア語学科）、佐崎淳子特任教授の3人が協力している。

本学でのセッションでは、植木教授を交え、本学の国際協力学専攻をモデルに、カリキュラムの改善点の洗い出し、修士論文指導法、教員や科目配置の工夫などについて議論。日本の国際協力系大学院の卒業研究の進め方や指導方法、大学院の運営方法などについての情報提供を行った。

植木教授は、「ホンジュラス側の課題は、修士論文の執筆が必須ではないこと。論文執筆は、知識や思考力の底上げや実務のスキルアップにつながる。また、指導力のある教員をいかに育て、集められるかも重要なポイントだ。ホンジュラスをはじめ、途上国には固有の事情もあり、先進国のやり方が必ずしもベストとは言えない。UNAHにとっての最善策を見つけられるよう、今後もサポートを続けたい」と話している。

千代田区事業「千代田学」

# 産前のパパ向け育児講座

## 看護学科の教員らがアドバイス

11月18日、1号館で「産前のパパ向け育児講座―出産前に考えるパパの役割―」が開催された。助産師の資格を持つ総合人間科学部看護学科の光武智美助教と同学科の近藤千恵助手が講師を務めた。

講座は、令和5年度千代田区事業「千代田学」の助成を受け、千代田区在住・在勤で子どもが生まれる前の父親を対象として実施された。

新生児の人形を抱っこする参加者

「産後のママの心身の変化」「赤ちゃんの睡眠リズム」「母乳育児」「赤ちゃんのお風呂」「新生児の抱っこ体験」「先輩パパとの交流会」などのプログラムが用意され、ぎこちない様子ながらも懸命にチャレンジする参加者の姿が見られた。

また、近藤助手は自身の研究データを示しながら、赤ちゃんの睡眠リズムについて説明し、赤ちゃんの睡眠に合わせた、産後の睡眠のとり方の工夫について具体的なアドバイスを行った。

父親の育児がますます期待される現代の社会や家庭に反し、父親が育児について学習する機会は母親よりも極端に少ない。今回の講座は、父親への学習機会の提供や、母親のサポートに役立てもらいたいという狙いがあったという。

参加した父親からは「赤ちゃんと父親・母親の睡眠リズムの研究データはとても説得力があった。大学と自治体が協働して開催するメリットを感じた」「母乳育児に関して、そのメリットを知ることができ、妻と子どもの栄養法についてよく話し合おうと思った」「子育てに関する知識を、根拠に基づいて教えてもらえたので、妻や家族と話し合うときに、とても役に立つと思う」「交流会では、先輩パパや参加者同士の意見交換ができ、不安な思いも安心につながった」などの声が聞かれた。

光武助教は、「千代田区に拠点を持つ大学の教員として、そして専門職である助産師の立場から地域の人々へその知見を伝えることで、地域貢献の意義を肌で感じることができた」と話している。


SUP 上智大学出版 新刊紹介

■『看護英語入門　ケアリング理論と実践』渡部良典／峰松愛子／塚本尚子【編】（1600円＋税）

■『ホセ・グァダルーペ・ポサダの時代―十九世紀メキシコ大衆印刷物と版元バネガス＝アロヨ工房』長谷川ニナ【著】／八木啓代【編訳】（2000円＋税）

■『文学を称賛して　社会学と文学の密接な関係』ジグムント・バウマン／リッカルド・マッツェオ【編著】／園部雅久【訳】（1900円＋税）

■■■

ぎょうせいオンラインショップ、全国主要書店および紀伊國屋書店上智大学店で販売中。オンラインショップはこちらから。